

平城京左京一条二坊十坪の調査

—第582次・第583次

1 第582次調査

本調査は、奈良市法華寺町における分譲住宅の建設にともなう発掘調査である。当初、南北16.0m、東西6.0mの調査区を設定し、のちに東辺南部を東西2.0m、南北2.0m拡張し、合計100㎡を調査した（図241）。調査期間は2017年1月30日から2月15日である。当該地は、法華寺旧境内の北方、平城宮の東方に隣接する左京一条二坊十坪の東南隅に位置すると想定される。本調査区の西方で実施した調査では、一条条間路北側溝と考えられる東西溝の北岸を検出している（第293-7次）。また、調査区の南東方や西方で実施した調査（第82-8次および第82-9次）で、底面に湿地状の堆積がある東西溝状落込の北岸を、調査区南西方の調査（第151-19次）では、似た様相の南岸を検出しており、一連の遺構と想定していた（『昭和58平城概報』）。

基本層序

基本層序は、地表から近現代造成土（約50cm）、床土（約30cm）があり、その下は南半部は橙褐色砂質土（後述、東西溝状落込SX11075埋土上層）となり、北半は橙褐色粘質土（整地土、約5cm）、黄褐色シルト（地山）となる。遺構検出は、南半部は橙褐色砂質土の上面（標高約70.5m）で、北半部は橙褐色粘質土もしくは黄褐色シルトの上面（標高約70.4m）でおこなった。

検出遺構

東西溝状落込SX11075 調査区南半で検出した落込。長さ5.0m以上、幅9.0m以上、深さ2.3m以上。底面は、調査区外の南方へさらに落ち込む。埋土は概ね4層（上から、橙褐色砂質土、橙灰色砂質土、黒色砂質土、焦茶色土）に分けられる。最上層はよくしまった橙褐色砂質土で、上面は奈良時代の遺構検出面となる。橙灰色砂質土および黒色砂質土も埋土で、後者から大型の自然木が出土した。こげ茶色土は腐植土が主体で、やはり大型の自然木が出土した。底面に数cmとわずかながら砂が堆積する。埋立および構築の時期は、埋土上面で検出した遺構よりも前であるが、いずれの土層からも土器や瓦の出土はなく、時期は確定し難い。第82-8・9次、第151-19次で検出した落込と一連の遺構と考えられ、南北約30m、

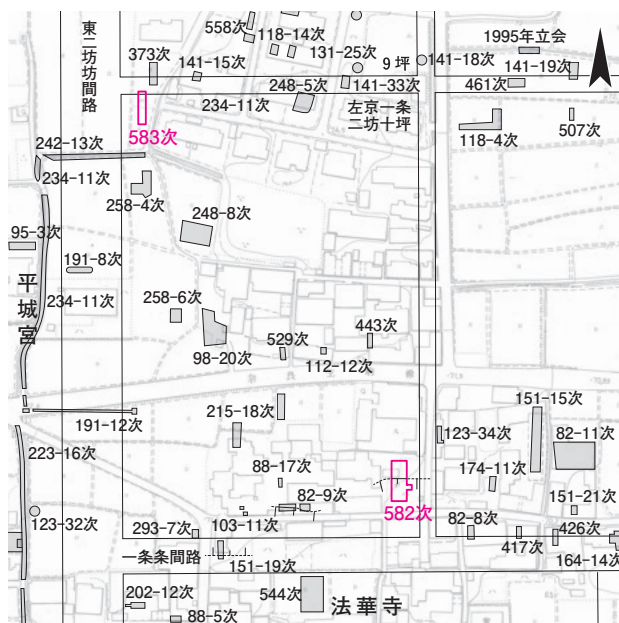


図241 第582次・第583次調査区位置図 1：3000

東西100m以上に渡る。平城京造営時の埋め立てと推測する。古墳の周濠の可能性もある。

柱穴SP11076・11077 調査区南部、上述の東西溝状落込の上面で検出した柱穴。両者の間隔は、約1.8m（6尺）である。東方延長部の有無を確認するため、調査区を拡張したが、顕著な遺構はなかった。SP11076からは近世の土師器皿および土釜片が、SP11077からは瓦質土器が出土した。

土坑SK11078 調査区南西部で検出した土坑。深さ約0.2m。奈良時代の土師器甕や須恵器杯などが出土した。

土坑SK11079 調査区北西部で検出した土坑。深さ約0.1m。中心部に炭化物が集中する。なお、第293-7次など既往調査でも炭化物を含む遺構を検出しており、冶金に関連する施設が周囲にあった可能性を示唆する。室町時代および江戸時代の土器が出土した。

土坑SK11080 調査区北東部で検出した円形土坑。奈良時代の遺物のほか、瓦質土器や巴文瓦など中世・近世の遺物が多量に出土した。深さ1.0m以上で掘り下げを止めたため、底面は確認できなかった。江戸時代の瓦質土器や土釜などが出土した。

高まりSX11081 調査区北辺で検出した整地土の高まり。調査区外の北方へ続く。このうち東半は前述の土坑SK11080埋立後に構築されており、段差はさらにその後の耕作による可能性もある。

出土遺物

遺構埋土および床土から、土器、陶磁器、瓦磚類、寛永通宝1点、自然木4点が出土した。（鈴木智大）



図242 第582次調査区全景（南東から）



図243 東西溝状落込SX11075（南東から）

土器・陶磁器 整理用コンテナ5箱分の土器、陶磁器が出土した。中世から近世にかけての土師器、瓦質土器、土釜、染付などが中心であるが、少量ながら奈良時代の土師器・須恵器も出土した。（神野 恵）

瓦磚類 本調査区から出土した瓦磚類を表に示した（表39）。遺構にともなう軒瓦は以下のとおりである。土坑SK1080からは奈良時代の6721Gb、6760B、施釉磚（釉薬はすべて剥離）とともに鎌倉時代の軒平瓦、近世の巴文軒丸瓦が出土、土坑SK11078からは近世の軒平瓦が5点出土している。（今井晃樹）

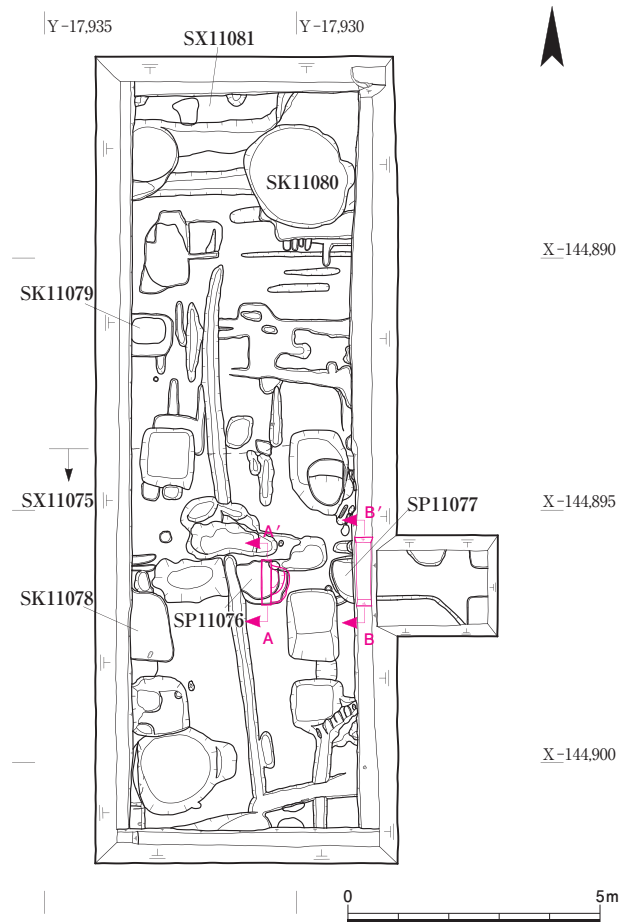


図244 第582次調査区遺構図 1 : 150

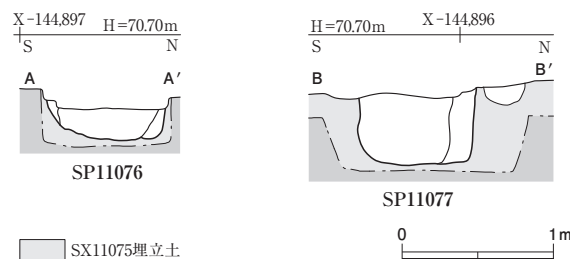


図245 第582次調査区柱穴断面図 1 : 50

表39 第582次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			軒棧瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	
巴（中世）	1	6667	A	1	近代	1		
（近世）	4	6721	Gb	1				
型式不明(奈良)	1	6760	B	1				
		鎌倉		1				
		近世		6				
		近代（刻印）		2	計	1		
							その他	
							平瓦（近世・刻印）	1
							（近世・カキ目）	1
							割鬩斗瓦（近世）	1
							鳥衾（近世）	1
							角棧垂れ付目板瓦	1
							用途不明道具瓦	5
							磚（奈良・施釉）	1
							花崗岩（礎石？）	1
計	6		計	12		計	12	
丸瓦			平瓦			凝灰岩	レンガ	
重量	25.188kg		79.935kg	2.216kg		6.075kg	0	
点数	135		796	2		2	0	

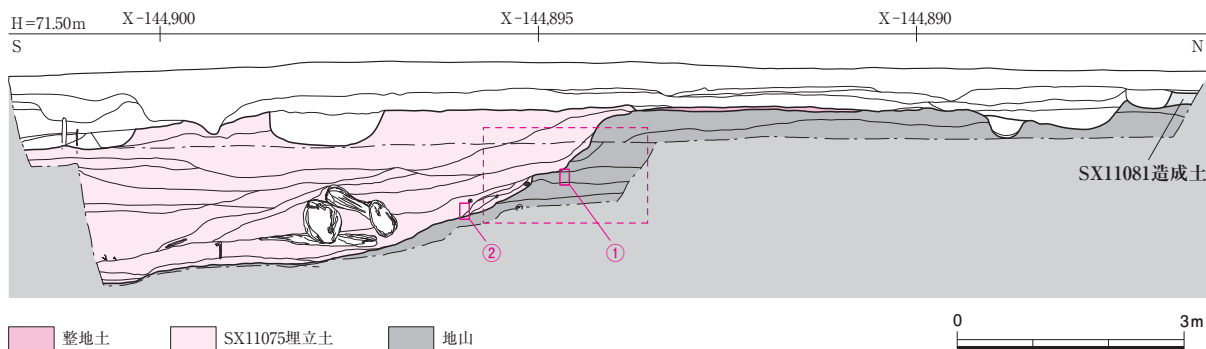


図246 第582次調査区西壁土層図と試料採取位置 1 : 100 (図中番号は図247に対応、赤点線は図248に対応。)

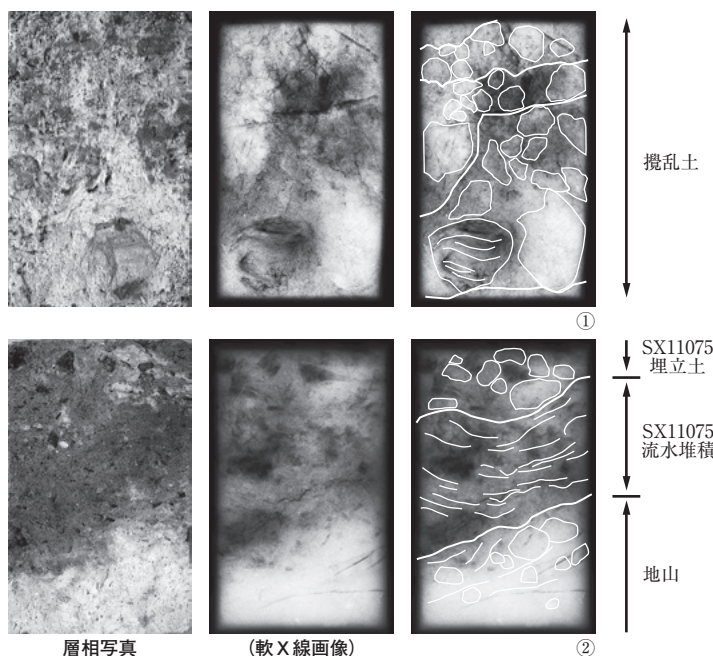


図247 東西溝状落込SX11075にともなう堆積構造
(試料採取層位は図246に対応)

地質学的検討

露頭観察から、東西溝状遺構SX11075の埋土は、その底部に数cm程度堆積する砂層を除き一般的な水成堆積物が認められず、いわゆる自然堆積と認識されるのは未分解の植物遺存体を多く挟在する埋土最下層の焦茶色土のみであった。溝状落込遺構の規模が比較的大きく、大規模な埋立作業が推察されることから、改めてSX11075の埋土および基盤層の特性をあきらかにするため、詳細な堆積構造の検討をおこなった。検討試料は、露頭において堆積構造の十分な観察の後、地山と認識されるSX11075の中段の肩付近(試料①)と、地山を一部にかけるようにSX11075埋土(試料②)を採取した¹⁾(図246)。

解析結果を図247に示す²⁾。まず全体として層の構成がほぼ偽礫からなる特徴がみられた。偽礫とは地層の中

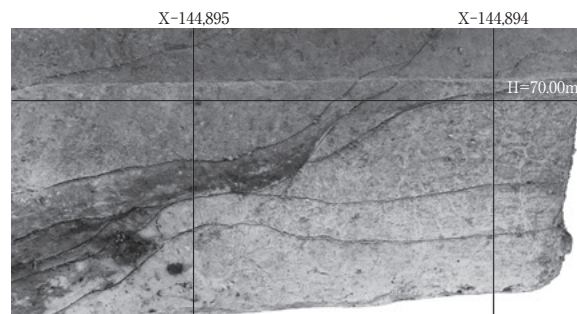


図248 SX11075北肩のひびわれ
(オルソ画像は山口欧志作成)

に礫のように紛れ込んだ未固結状の堆積物のことを指す。作土や土木工事といった人為による土壌攪乱の際に形成しやすく、人為形成層を捉える指標の一つである。ただし偽礫の形成は、人為以外にも河岸や斜面を構成する堆積物の浸食や剥落による土塊の堆積もあるため、偽礫の含まれる層全体の堆積システムを十分に検討する必要がある。また同様の土塊形態には、植物の根抱えにより形成される土塊団粒などがあるが、この場合、粒径は数mmから2cm程度になることから、本報告で観察される土塊には当てはまらない。試料①についてみると、偽礫の形状は角礫状を有しているものが多く、粒径は2～5cm程度の比較的大きなものが多い。円磨や引き延ばしたような変形形状がみられないことから、浸食や運搬といった水の作用の影響は小さく、偽礫の初期形状を維持しているものが多いことが推定される。一方、谷部壁面を調整するような作土や土締めにとりまう加重変形もみられず、人為性も示唆されない。そこで改めて層相の確認をおこなった(図248)。SX11075の谷は段丘状を成しており、試料①採取箇所付近は1段目に当たる。この1段目の肩に羽状構造およびロード構造がみられ、その北側には毛細状の砂脈の貫進がみられる。これらの構造は震度5弱以上の大地震の際

に、地下水位の比較的高い軟弱地盤で発生しやすい、液状化にともなう一連の地質構造として認識されている。このため試料①に認められる偽礫は、この地震動にともなう地質の破壊を示すいわゆる地震痕跡である可能性が高い。砂脈の吹き出し（噴砂）は、SX11075によって切られており、地震の発生時期はSX11075埋立以前とわかる。試料②の地山にも1～2cm程度の偽礫がみられるが、土塊はラミナ構造を構成する一部になっており、浸食によって形成されたマッドクラストとして認識され、自然堆積と考えられる。この構造は直上のSX11075埋め立て土底部に堆積する流水構造に顕著にみられる。この層に挟在する偽礫は5mm～2cm程度、流下方向に引き延ばされるような形状をもち、マッドクラストとして典型的である。この層の上位には同程度の粒径の偽礫が、堆積構造をとまわず堆積している。SX11075の埋め立ては、この時期から本格化した可能性がある。（村田泰輔）

まとめ

坪の南東隅に想定される本調査区は、近現代における削平が多かったものの、奈良時代に溯る可能性がある土坑や中近世の柱穴や土坑などを検出した。

また、調査区南半では、周辺の調査区で検出していた東西溝状落込の北岸を確認し、全長が100m以上におよぶことがあきらかになった。平城京遷都より前のこの地域の様相や平城京造営期の土木工事を考える上で、貴重な成果といえよう。（鈴木）

2 第583次調査

本調査は、奈良市法華寺町における個人住宅の建設にともなう発掘調査である。当初、東西3.0m、南北10.0mの調査区を設定し、のちに南方に3.0m拡張し、合計39㎡を調査した（図241）。調査期間は2017年1月30日から2月15日である。

当該地は、法華寺旧境内の北方、平城宮の東方に隣接する左京一条二坊十坪の西北隅に位置すると想定される。しかしながら、周辺地域における畦畔の乱れや、既往の調査（第248-5次・第373次など）で一条条間北小路に関連すると断定できる遺構が検出されていないことから、坪の北辺については不明確であった。

基本層序

基本層序は地表から、宅地造成土（約30cm）、床土（約



図249 第583次調査区全景（北東から）

30cm）、茶褐色土・灰褐色土（遺物包含層、約20cm）、黒褐色土（炭化物・遺物多含、約10cm）となり、その下は、北部は黒色土（炭化物・奈良時代前初頭から前半の土器など遺物多含、約5cm）、黄褐色土（整地土、約40cm）、緑灰色土（地山）、南部は黄色土（整地土）、緑灰色土（地山）と続く。遺構検出は、黒褐色土および黄褐色土の上面（標高約72.2m）でおこなった。

検出遺構

東西溝SD11090 調査区の中中部で検出した東西素掘溝。幅約4.0m、深さ約0.7m、南岸の立ち上がりは緩やか。埋土は大きく5層にわかれ、埴埴・羽口・鉄滓・銅滓・炉壁片・炭化物などを多く含み、冶金に関連する廃棄物と考えられる。最上層から圈足円面硯2点が出土したほか、漆附着土器や転用硯が多く出土した。全体的に土師器高坏および漆附着土器が多く出土した。またこれらのなかには、後述する土坑SK11095付近の黒褐色土から出土した須恵器・土師器と接合関係にあるものが含まれていた。

東西溝SD11091 東西溝SD11090の南肩で検出した東西素掘溝。幅約1.2m、深さ約0.5mで、断面形状は台形を呈する。埋土は、大きく2層に分かれ、下層から漆付

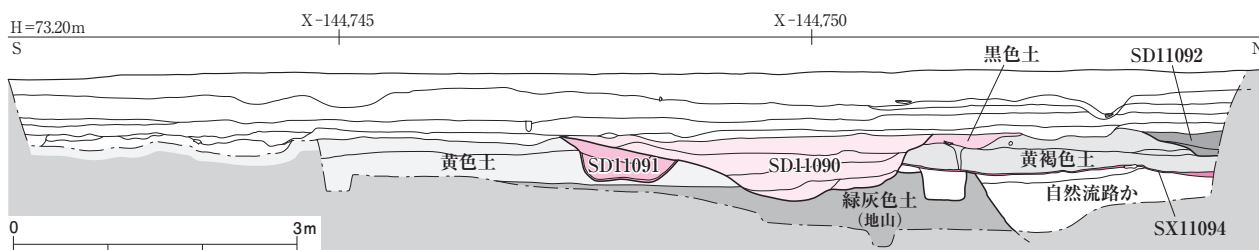


図250 第583次調査区西壁土層図 1 : 80

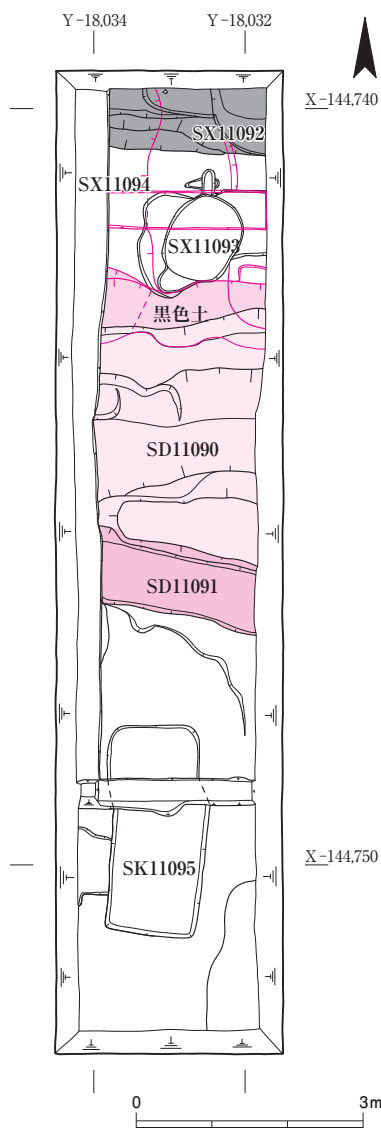


図251 第583次調査区構図 1 : 100



図252 SD11091 (左)・SD11090 (右) 西から

炭層SX11094 調査区の北西部において、黄褐色土の下層で検出した。東で岸状に立ち上がる。奈良時代前半の須恵器が出土した。

土坑SK11095 調査区の南部、黄色土上面で検出した長方形土坑。幅約1.2m、長さ約2.7m、深さ約0.3m。埋土は炭化物を多く含み、風字硯、奈良時代前半の須恵器および土師器が出土した。

(鈴木)

出土遺物

遺構埋土および整地土などから、土器・土製品、瓦磚類、冶金関連遺物などが出土した。

土器・土製品 整理用コンテナ10箱分の土器、土製品が出土した。ほとんどが奈良時代のものである。SD11091および黒色土からは奈良時代初頭から前半期の土師器杯A、須恵器杯A、杯B、杯B蓋、鉢Aなどが出土した。その中には、漆附着土器や転用硯も一定量含まれる。SD11090からは奈良時代後半の土器が比較的多く出土した。土師器は碗A(1)、杯A(2・3)、皿A(4~6)、高杯(7)、甕などがあり、高杯やや多い特徴がある。須恵器は杯A(8)、杯B(9・13)、杯B蓋(11・13)のほか、長頸壺の蓋(10)や、正置焼成の圈足円面硯も1点(14)出土している。SK11095から硯面が使用によって摩滅した風字硯(15)と高杯の脚部の上端を転用した紡錘車(16)が出土した。

(神野)

瓦磚類 出土した瓦は、軒丸瓦3点、軒平瓦1点、丸瓦2.5kg、平瓦4.1kgである。軒丸瓦は奈良時代の6301C 1点のほか、奈良時代の瓦が1点、近世の瓦が1点、軒平瓦は藤原宮式の6641Cが1点出土した。

(今井)

冶金関連遺物 東西溝SD11090・SD11091および炭層SX11094から出土した。埴塼片、轆の羽口片、炉壁片、

着土器と転用硯が多く出土した。前述のSD11090の最上層と同じ傾向を示しており、両遺構は一連の工程で埋め立てられたと推測できる。

くぼみSX11092 調査区北辺で検出したくぼみ。一条条間北小路南側溝の可能性を考えて調査したが、完掘したところ、くぼみが連なる様相となった。詳細な性格は不明である。奈良時代の土師器や須恵器などが出土した。

くぼみSX11093 くぼみSX11092の南で検出したくぼみ。坪の北辺を区画する東西堀の柱穴となる可能性を考えて調査したが、整地土上面の浅いくぼみであった。奈良時代の土師器および須恵器などが出土した。

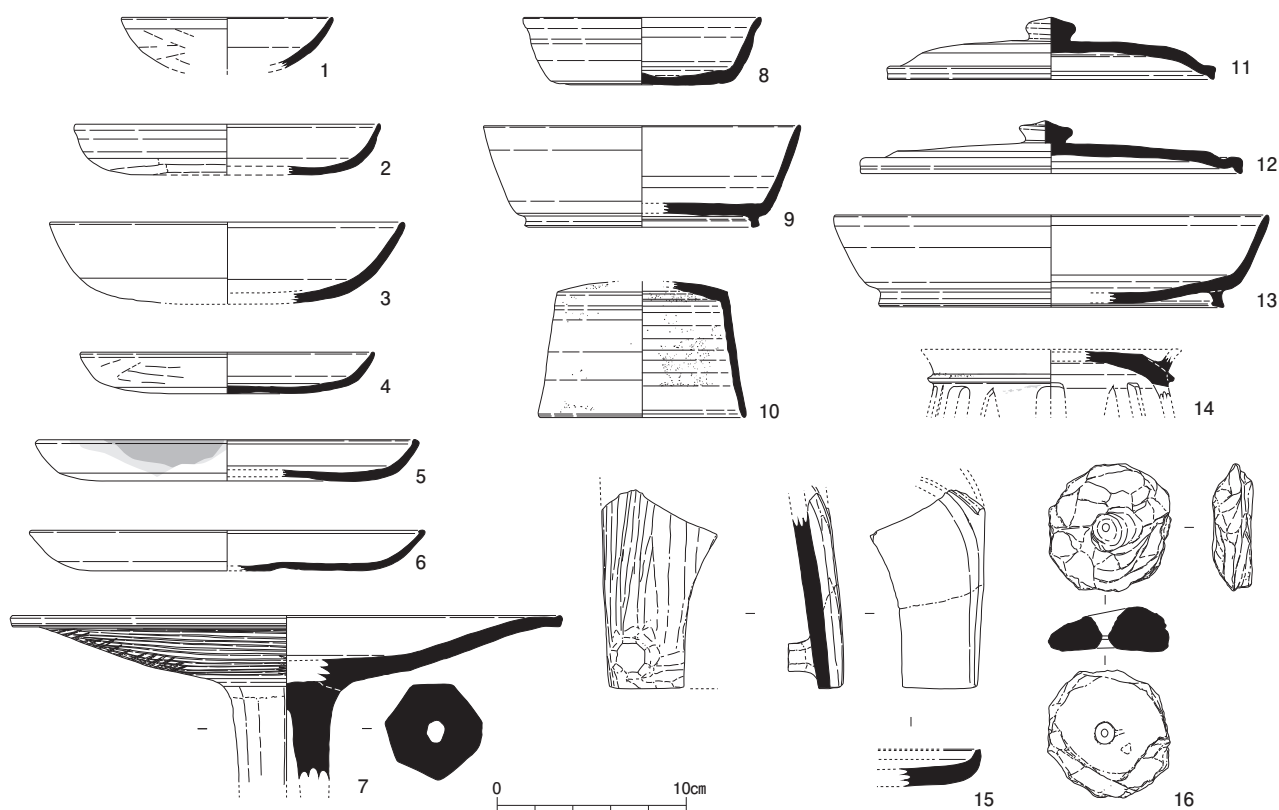


図253 第583次調査出土土器 1 : 4

銅滓、鉄滓（碗形を含む）、粒状滓、鍛造剥片、鑄型片、被焼礫などからなり、出土遺構による組成の差は見られない。特筆すべき遺物に、粒状金（図254-1）と溶銅（図254-2）がある。前者は直径2.3mm、厚さ1.4mm、重量67mgで、蛍光X線分析により金であることを確認した。平面形はややつぶれた円形で、片面が比較的平滑であるのに対し反対側の面は凹凸が著しい。鑄造の際に生じた湯玉か、何らかの装飾品の部分の可能性もある。希少品である金が廃棄的な脈絡で検出された珍しい事例といえる。後者は長さ6.8cm、幅5.6cm、厚さ6mm、重量31.2gで、蛍光X線分析によりヒ素を含む青銅であることを確認した。形態からは銅金具が被焼・溶解した破片の可能性も排除できないが、全体的な表面の特徴を重視し、鑄造の際に生じた余分な湯が固化したものと判断した。端部に一部切断・研磨痕が確認されるため、青銅素材として使用された残片が廃棄されたものと考えられる。総じて、これらの冶金関連遺物は金・銅・鉄、そして鑄造および鍛造と関連するものを幅広く含んでいる。調査区周辺における冶金関連活動を復元する上で重要な発見といえる。

（庄田慎矢）

まとめ

当初、一条条間北小路の南側溝が想定された調査区北辺では、くぼみが連なる様相を検出した。道路側溝と断定できる状況ではないが、南側溝に関連する可能性が残る。一方、調査区中部以南では、炭化物を多く含む整地土

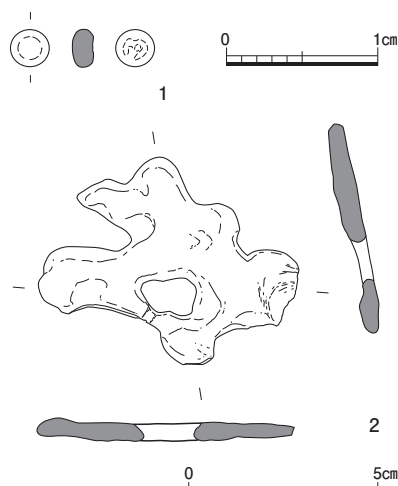


図254 東西溝SD11091出土冶金関連遺物

を確認し、土坑や東西溝の埋土からも冶金に関連する遺物が極めて多く出土した。また遺構面が焼けて硬化するような状態ではないことから、本調査区は、近傍に所在した冶金関連施設の廃棄に関連する一角と想定される。平城宮の東方、法華寺の北方の区画の利用状況を考える上で重要である。

（鈴木）

註

- 1) 試料の採取にあたっては、14×22×4cmのスチロール角型ボックスを用いて堆積層を切り出した。
- 2) 切り出した試料は研究所に持ち帰り、層相観察、層相の写真撮影をおこなったあと、フジフィルム社製軟X線撮像装置（μFX-1000）とイメージングプレートを用いて地質構造の撮像をおこなった。イメージングプレートのスキャンにはフジフィルム社製BAS-5000を用いた。